

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

現在、小・中学校では、学習障害を有する児童生徒や学習障害の傾向を強く示す児童生徒に対して、一人一人の教育的ニーズを把握し必要な支援が行われつつある。漢字学習は、教科学習全般で求められ、指導上の必要性が大きい。しかし、通常学級在籍児童の漢字の学習困難の背景要因については、検討が十分でなく、解明が望まれている。本論文は小学2年生から6年生の児童(総数 9676 名)を対象として読み書き調査を行い、それに基づき漢字読字困難のリスク要因を明らかにした研究である。本論文は、漢字読字困難の評価と支援につながる研究という点で教育および臨床上の意義がある。また日本語の LD に関して、従来、ひらがな音読の特徴より検討されてきたが、漢字の読字習得の基準値を明らかにし、漢字単語の心像性効果を明らかにすることで、読み書き困難の特徴を明らかにした点に本研究の独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文の研究方法は、特別支援に関する心理学の領域でよく使われる代表的な方法である。また、リスク要因の解析に用いられる多重ロジスティック回帰分析を、読み書き困難のリスク要因の解析に適応した。あわせて、リスク要因相互の関係を明らかにする方法としてその有効性が指摘されている、CHAID 分析を、リスク要因の解析に用いた。これらの分析は、従来の基本的な手続きに沿って行われた。

以上のことから、本論文で用いられている方法は研究目的に合致したものであり、当該学問分野において妥当なものであると評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、関連する従来の文献が適切に収集され、研究の背景が明確に述べられている。特に、小学生の低学年 LD の背景要因に関連する欧米の研究知見について、綿密に検討されている。データ収集に際しては、対象児の人権に対する配慮が十分になされている。調査実施と研究発表に関しては、教育委員会と小学校長の承諾を得た。教育委員会と小学校長は、授業改善の取り組みの一つとして調査を実施した。調査と研究の趣旨を保護者に文書で伝え、小学校を通して研究協力と結果発表の同意を得た。調査結果については、個別の情報として小学校に報告を行い、あわせて、低成績者に対する指導や支援方法を提案した。データ分析も適切になされた。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文の結論において、小学 2~6 年生を対象に漢字読字困難のリスク要因の発達的な変化を検討した。その結果、小学生低学年の漢字読字困難のリスク要因は、特殊音節の未習得、並びにひらがな単語の流暢な読み困難であることを指摘した。また、高学年では、言語性短期記憶の不全、次いでひらがな単語の流暢な読みの困難がリスク要因であることを指摘した。高学年のリスク要因については、漢字単語の読みに心像性効果が認められたことから、考察と結論

が妥当であることを指摘できる。これらの知見は、従来の研究において報告されておらず、本研究で詳細に明らかにされたものである。その点で学術的な水準に達していることを指摘できる。さらに、漢字読字困難のリスク要因に関する検討を踏まえ、小学2年生を対象に行った漢字読字困難に関する支援効果に関する研究により、本論文の知見を臨床研究の中で検証できた。その際に、ひらがなの流暢な読みの程度によって、流暢群と非流暢群に分けて支援効果を検討し、両群での介入効果を確認した。またリスク要因を複数有している群は、漢字単語の読みの保持に弱さがあることを指摘した。このことは、通常学級における学習支援を計画する上で重要な知見であり、基礎研究を教育臨床に応用する上での妥当性を示したものであり、学術的水準に達していることを指摘できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文で示された通常学級における漢字読字困難児のリスク要因についての提案は、通常学級における学習支援の在り方を計画する上で、きわめて貴重である。この点については、日本特殊教育学会で高く評価され、2015年度の日本特殊教育学会奨励研究賞を受けた。これより、教育臨床上、有意義な研究であることを指摘できる。

また、本論文で示された漢字の読み困難に対する支援に関する知見は、通常学級での学習支援の基礎的知見となるものである。これより、本論文は、取得学位にふさわしい意義を有し、特別支援教育の展開に成果をもたらすものであることを指摘できる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしいとの評価を行った。